

仁王さんとおう
熊本県

むかし、あるところに、仁王さんという力自慢ちからじまんの男の人がいました。どんな力持ちでも、仁王さんになう者はいませんでした。

仁王さんは、いつも力があまって、うずうずしていました。それで、道ばたの松や杉の大木をたおしたり、大きな石を山の上から海に投げこんだりしていました。

ある日のこと、友だちが仁王さんの所にやってきました。仁王さんが悲しそうにしているので、友だちは、

「おまえ、どうしてそんなに悲しそうな顔をしているんだ」とききました。仁王さんは、

「おれは、この世で、おれより強いやつに会ったことがない。たいくつでしかたがないんだ」と答えました。すると、友だちがいました。

「海のかなたの国に、ガマっていう力持ちがいるのを知っているか」

「知らん。いったいどんなやつだ」

「この世にくらべる者がいないってほどの力持ちだそうだ」

「そりゃあ、おもしろい。いいことを教えてくれた。じゃあ、さっそくそのガマと力くらべをしてこよう」

仁王さんは、船をこいで、ガマのいる国に向かいました。

何日かこぎつづけて、ようやくガマの国に着きました。

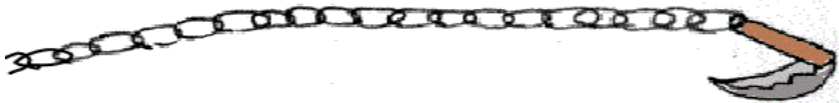
仁王さんは、まっすぐガマの家に行きました。ガマは出かけているすでした。

ガマの奥さんが、

「ちよつと一服いっふくして待っていてください」といったので、仁王さんは、「それでは」と家に戻りました。そして、たばこをすおうとすると、奥さんが、片手にたばこ盆ぼんを下げて持ってきてくれました。仁王さんは、たばこ盆を引きよせようとしたが、鉄でできた大きなたばこ盆は、重くて動きません。仁王さんは、おどろいて、

（奥さんでもこれほど力が強いのに、ガマの力はどれほどだろう）と、こわくなってきました。

奥さんと話をしているうちに、仁王さんは、ガマが帰ってこないうちに、逃げたほうがよさそうだという気になって来ました。そこで、



「ちよつと、そこらを歩いて来ます」といつて、家を出ました。

仁王さんが歩いて行くと、子どもたちが遊んでいました。そこで、

「ガマっていう人は、どれくらい強いんだい」とたずねました。子どもたちは、

「山を、一日に何度も置きかえるんだよ」といいました。仁王さんは、

（こうしてはおれぬ）と、あわてて船まで走って行って、こぎだしました。

さて、ガマは、家に帰ると、奥さんから仁王さんのことを聞いて、

（ぜひ力くらべをしたい）と思って、探しに出ました。浜辺まで来ると、仁王さんの船が遠くに見えました。そこで、

「おい。どこへ行くんだあ。帰って来い、もどって来い」とよびました。

仁王さんは、聞こえないふりをして、どんどん船をこぎました。ガマは、家にもどつて、長いくさがりがまを取って来ました。そして、力いっぱい、船に向かって投げました。くさがりがまは、ひゆるると飛んで、仁王さんの船にかちりと当たつて、船の^{とこ}艫にぐざりとささりました。

ガマは、くさをり^{はちまんだいぼさつ}をたぐり始めました。船は、ずんずん陸に引きもどされて行きます。仁王さんがいくらこいでも、船はもどって行きます。くさがりがまをぬこうとしても、ぬけません。

仁王さんは、八幡大菩薩^{はちまんだいぼさつ}に祈り始めました。引きもどされて行く船の中で、一心^{いっしん}に祈りました。そのとき、ことりと音がして、目の前に、やすりがひとつ落ちてきました。仁王さんは、「これはありがたい」とつぶやいて、やすりでくさをりを切り始めました。あと少しで陸に着くというとき、くさはり^{はちまんだいぼさつ}はまっふたつに切れました。

そのいきおいで、ガマは、はるか後ろのほうに飛んで行って、ひっくり返ってしまいました。そのまに、仁王さんは、一生懸命船をこぎ、家に帰りつきました。

こうして、仁王さんは、八幡さまにもらったやすりのおかげで、命びろいしました。それからというもの、仁王さんは八幡さまの家来になって、門番をするようになったということです。

おしまい